

「会津の戦い」を地図で見ると

～歴史学習に地図帳の活用を～

西会津町立奥川小学校 石本 浩一

1 はじめに

歴史学習において、地図帳を使ってその歴史の舞台を見つめさせていくことは、社会的事象を空間的に理解するばかりでなく、自然条件や社会的な条件とのかかわりを読み取りながら、多面的、総合的にとらえていくことに結び付くと考える。そこで、新政府軍と会津藩との戦い「会津の戦い」について、その前後のできごとについてもふれながら、都市と街道をたどり、点と点を線で結び付け、それをつなぎ合わせて、歴史の舞台を面で広くとらえさせていく学習を考えた。

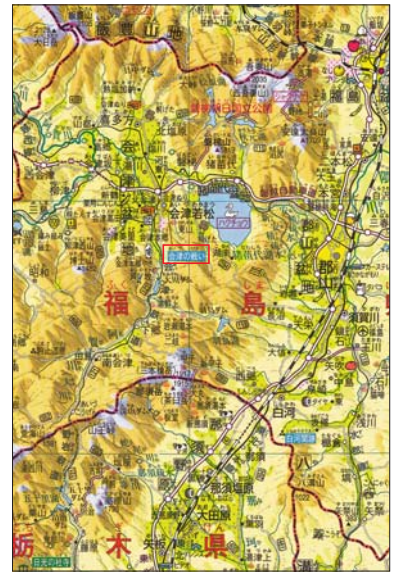
2 新政府軍の会津藩侵攻ルートを探る

はじめに『楽しく学ぶ小学生の地図帳（初訂版）』p.35～36「関東地方の地図」を開き、青で囲って記されている「会津の戦い」の位置を確認させる。そして江戸城開城から会津藩の降伏までのおもなできごとを年表に書き込ませる。次に、江戸を出発した新政府軍が、板垣退助らを中心として討ち落とした白河城と二本松城に印を付けさせ、奥州街道を北上してきたことに気づかせる。その後、会津に入ってきたことから、白河市と二本松市から会津若松市に入ってくる道を探させる。すると子どもたちは、白河市から郡山市湖南町を通ってくる道と、本宮市から沼尻を越えて猪苗代町を通ってくる道を発見した。どちらも1,000mくらいの山を越え川を渡らなければならなかったこと、縮尺を用いてみると、江戸から大砲を押しながら260km以上も歩いてきたことに驚いていた。

越後方面では、新潟港と阿賀町と西会津町に印を付けさせ、越後街道に気づかせると、新政府軍が阿賀野川を何度か渡河したり、越後山脈を越えたりしながら鶴ヶ城めざして戦ってきたことに驚いていた。

さらに、栃木県の日光市と南会津町田島を通して会津若松市に至る日光街道周辺の地形を、p.18の断面図を参考に読み取らせると、ここでも山岳地帯の峠道を越えてきたことに気づいていた。そして米沢街道では、山形県境の大峠付近に部隊を配備させていたことから、大峠から喜多方市塩川を通り鶴ヶ城までの道を見つけさせるとともに、鶴ヶ城を中心として方位を確かめさせ、会津藩が国境の四方を守っていたことに気づかせ、「白虎隊」「朱雀隊」「青龍隊」「玄武隊」は、その名を四方を守る四神から冠したものであることを説明した。

そして最後に、地図帳p.16～19を活用し新政府軍の中心である薩摩藩や長州藩から会津までの距離や、会津藩士が移住した斗南藩（青森県むつ市）までの経路および北半島



『楽しく学ぶ小学生の地図帳（初訂版）』p.35

の自然環境などについて調べさせながら、当時の人々の生き方やその思いについて話し合わせた。このように地図帳を使って「会津の戦い」の全体像をとらえさせた。

3 おわりに

これからの社会科では、各種の資料から必要な情報を集めて考えを深めたり、学習や生活の基盤となる知識・技能を習得したりしていく学習の工夫・充実がより求められる。そのためにも地図帳の積極的な活用が大切である。そして、社会的事象の意味やそのはたらきについて自分の考えをもち、公正に判断できる子どもを育てていかなければならない。